

---

# 孤独の天使

いろは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独の天使

### 【Nコード】

N5790I

### 【作者名】

いろは

### 【あらすじ】

幼少期に偶然仲良くなった年上の女の子。実はその子は主人公の住んでいる国のお姫様だと聞かされる。

主人公はそのお姫様とより近くに居るために必死で戦闘の術を学び15歳という若さで皇女親衛隊の入隊試験を受けることを決意する。そして後に起こる事件から始まる戦いの渦に主人公達も巻き込まれていく・・・

## 序章（前書き）

1、この小説にはバトルシーンなどもありますので過激な表現を  
する場合がございますので、その類のものが苦手な方

この前書きを見た瞬間なんだこのへボオーラむんむんの小説は・・・

、  
と思った方はあせらずに左上の ボタンをポチッとおしてください。

2、小説を書くのは初めてなので至らないところしかありませんが  
それでも、

なんだこのひどい文はよっ、まあしかたねえからちよっただけ見て  
ってやるか

という心優しい方はマウスのホイールころころしながら

ゆっくりしていつ（ry

## 序章

カーテンの隙間から入り込む朝の暖かな日差しにはとても気持ちいいものだ。

そしてその日差しの中でコーヒーを飲む。これこそ至福のときといえるだろう。

しかし、まだまだ子供自分がこんな洪いことをするのもどうかと・

いやいやっ、年齢は15歳だが心はすでに大人なのだっ！

と心の中で叫ぶどう考えても心も子供な少年が一人。

まあそんなことはさておき

今日は今からある人の直属部隊が創設されるのにつき、その部隊への入隊試験があるのでそういう訳にもいかない。

というわけでそのへんは話が進むうちに覚えていつてほしい。

ん、話ってなんのことだ？

わけわからんからどうでもいいや、そろそろ本当に気合いれていかないと・・・

それでは行つてきます！！

レンガのような四角い石材で作られた壁の中、数人の男女が真剣な面持ちで用意された簡易型のイスに座っている。

といっても女性は一人、男が二人だけであるが。

数分前までは後十人ほどいたが、時間が経つにつれてその人数も減ってきている。

その中でも一人の男と女性は元から知り合いだったのだろうか、多くはないが数回言葉を交わしている。

時折響いてくる爆音や金属がぶつかり合う音のせいで高まるプレッ

シャーの中一人のこの中では最年少と思われる一人の少年が口を開いた。

「僕達の番ももうすぐですね」

「そうだな、ボウズ」

と、外からでは顔以外の全身を覆う鎧のせいで直接はみえないが明らかに筋肉隆々な、

しかしどこかやさしそうな無精ひげをはやした男。

「あなたがどのくらい強いのかは見た目だけじゃわからないけど、今はお喋りより今までの修行を思い返しておいたほうがいいわよ？」

と、無精ひげの隣のぱつとみただけでお世辞抜きで綺麗だと思える黒髪ストリートヘアの女性。ちなみにこちらは魔法使いのようだ。

「はあ、すみません」

特に怒られたわけではないがその落ち着いた物腰に気押しされてか少年は謝ってしまう。

「いいのよ、私もあなたを責めるつもりで言ったんじゃないのよ？あなたみたい な子には後悔してほしくないから・・・」

そういった女性の瞳には過去に何かがあったのだろうかと思わせる哀しい色がうつっていた。

一瞬場の空気が暗くなったように感じた少年は何を言えばいいのかもわからず黙り込んでしまう。

そんな少年に無精ひげは軽く声をかけ、自分で話しながら自分で笑う。

「レインは子供には優しいからな。だからって惚れんじゃねえぞ？ハハッ」

「そ、そんなことないですよっ!？」

無精ひげは言いながら、元が無愛想なだけに優しいとまでは言えないような気もするが、と思いき自然とひげで囲まれた口の端が上がる。

「冗談ばかり言わないで、それこそこの子の邪魔になるわ」

「ああ、わるいわるい」

とレインのもっともな発言に素直に謝る無精ひげ。

話し方からしてこの無精ひげとレインと呼ばれた女性は普段から行動をともしているようだ。

それはともかく、一瞬暗くなりかけた空気から無精ひげのおかげで元の雰囲気に戻れたことに感謝し、  
そして安心していった少年にもついにお呼びの声がかかる。

「桐原啓助様、外へお願いします」

最初の頃こそ緊張していた少年だが呼ばれ時にはいつしか緊張もだ  
いぶほぐれていた。

## 序章（後書き）

いっぱい書いたつもりだったけど呼んでみると全然じゃないか、

こんな駄文に付き合ってくださいました皆様、本当に感謝です。

この小説は完成どころか今やつとどんな話にするか決まったばかり  
というような物なんで感想とかレビューに希望とか書き込んでもら  
えれば

もしかすると物語のなかでそれらしきことが起こるかもしれません。  
皆様、どうかよろしくお願いします！！

もしよろしければ にメールしてもらえるとうれしいです。

a a . w r i b . i r o h a g m a i l . c o m

得意分野を一つ極めていくのもいいけど、学校の入試とかでも身をもって体験

今回の題名ぶざけててスイマセンorz

でもなんかかつこいい題名とか見つからないし、かつこいい題名なんてぜったそのうちネタが尽きるから

アニメ、魂のようにわけわからんくらいながいタイトルってのもいいかなあ、って思いましたですね・・・(p ^ ^ )

まあこれからもこんな感じでいきたいと思えますのでよろしくお願ひします。

それでは第2話「得意分野を一つ極めていくのもいいけど、学校の入試とかでも身をもって体験したように、世の中得意分野は多いほうが得なのである。」をお楽しみください。

得意分野を一つ極めていくのもいいけど、学校の入試とかでも身をもって体験

「ボウズ、頑張れよ」

無精ひげはさつきほんの少しだけしゃべった少年にエールを送る。

「はいっ。おじさんたちも頑張ってくださいよ?」

まったく、余裕かましがって。俺達が試験通ってあのボウズがおちたら盛大におちよくなってやりてえなあ。

まあ会うことがあればだけどな。でも・・・

「あたりめえだあ、もしボウズが試験通ったら飯でも連れてってやるよ。俺が試験通るのはもうきまってるからな」

それでもやっぱりあんな子供が頑張ってたんだ、応援くらいしてやらねえとな。

「はははっ、わかりました。それでは行ってきます!」

少年はどこかの世界のファーストフード店で“スマイルください”と言われたときの店員とは違い、

本当に無邪気な笑顔であつたばかりの自分達に向ける。

その笑顔に俺は

「おう」

と、そして少しの間喋っていなかった隣に座っている美人の連れ、レインも口を開く。

「がんばりなさい」

「はいっ」

もう一度少年は元気にそう言う俺達に背を向け、扉を開いて審査員達の待つ中庭に走っていった。

「受験番号36番、桐原啓助です！」

そういつた自分の前には緊急会議会議用の長い机を前にイスに座っている審査員が3人その隣には

腰に剣をつけたどこかの剣士らしき人と先ほど自分を呼んだ人と思われる女性が立っている

そして中庭の壁から突き出たフロアのようなところには、男にしては長めで少し癖毛な髪の毛の、豪華な服をまとった男、

そしてその隣にはこれまた豪華なドレスのまだまだ若い女性が煌びやかなシルク張りのきらびやかなイスに座っている。

そしてさらには中庭の両脇の通路に集まる試験を受け終わった者やこの国、エルカレス帝国の上流階級の者達が見物に集まっている。

フロアらしきところに居る二人に関してはずでによく知っている人である。

女性の方は今から自分が入ろうとしている隊の護衛対象？いやちょっと違うような気がする。

うーん・・・まあとりあえずこの隊の核のような人物。

そして自分が幼少期に偶然知り合い、それ以来憧れを抱いてきたこの国のお姫様である。

そしてその隣の男性は当然お姫様の父親、つまりこの国の王様なのだ。

王様とはそのお姫様と仲良くなってから初めてお城にお邪魔させてもらったときに知り合い、

今では普通に談笑したりする中だ。

お姫様の母親はどうやら今日はきていないようだが、こちらも父親と同じようにだいぶ仲がいい。

今のこの国の現帝王（お姫様の父親のことだが）は前帝王、ラグナスが死亡した後に、その息子と正式な一騎打ちで勝負を挑み激闘の末勝利を収めて帝王となったため

帝王やその家族も堅苦しさなどほとんどなく、初めて家にお邪魔させてもらったときも、

自分の家の階級のことなど全く聞かずに夕ご飯をご馳走になったりして本当にやさしくしてもらった。

ちなみに現帝王、とくながしゅうや徳永修哉と激闘を繰り広げたレイ・カリウスもご健在で、

最初の頃こそ家族共々悔しがっていたものの、徳永家の雰囲気のおかげか、今では魔法抜きでは帝国内で最強といわれている部隊、

《帝国の盾》インベリアル・シールドの中核となっていていつこの大陸の残り二つの国が侵攻してきても対応できるように毎日訓練に励んでいる。

「よろしい、この試験は事前に通達した通り、まず一次試験にて戦闘力を。そして一次試験を通った者を二次試験にてその人格が部隊のものに相応しいかどうかを測ります」

そう真ん中の審査員がいう。

「なので今すぐ実技試験に入りたいと思います。一応確認しておきますが、準備もう済んでおられますね？」

「はい」

そう言いながら思う。

いやあ、やっぱり緊張するなあ・・・

見物人も予想以上に多いしこういうお堅い行事は初めてだからなあ。まあ仕方ないけどね、これも杏奈ともっといっしょにいるためだもんな。

「こちらも事前に通達した通りですが一応試験内容を確認します。

今回の一次試験の内容は、そこにおられる帝国軍第13小隊の小隊長殿との模擬戦にて戦闘力を測ります。魔法使いの場合ペアと組んでそのペアのどちらかが一撃を加えることが最低条件です。しかし剣士の場合5分間小隊長殿の攻撃をかわすなり弾くなりして自分の身を守り続けるか、一撃を加えることが条件です。剣士の場合どちらかをクリアした時点で一次試験は通過となります」

審査員は机の隣で背筋を伸ばして立っている剣士を見ながら言う。

小隊長と言うだけあって体はしっかりしそうだし、その立ち姿からも強者とまではいかないが、なにかしら武術に精通した者の風格が

漂っている。

「一人で来られたという事は剣士での受験でよろしいですね？」  
そこで俺は思った。

「一つ質問をいいですか？」

「・・・?どうぞ」

そして俺は言った。

「魔剣士の場合どうすればいいんですか？」

一瞬中庭は静まり返り、騒然となった。

得意分野を一つ極めていくのもいいけど、学校の入試とかでも身をもって体験

はいー、いろはです。

一日ぶりの投稿です(=。。(ノ

自分でもなかなかいいペースでの更新だと思えます、ハイ。

まあたぶん今から忙しくなるんで段々更新スピードも落ちてくると  
思いますが

そのへんは優しく見守ってください・+(\*´^ ^´\*)+・

今回は帝国についての説明みたいなことも多かったですがあまあ  
いい感じでまとまったつもりです。

でもあんまり話が進まなくて申し訳ないです。今まで見てきた小説  
を書いた人をいまさらながら改めて尊敬しなおしますた。

そんなわけでこれから小説家のみなさんを見ならって精進してい  
きたいと思えます。

それではついにへたくソな戦闘シーンが期待の第3話で会いましょ  
う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5790i/>

---

孤独の天使

2010年12月18日23時50分発行